

ネットの基盤をつくった千川先生

三宅の経験を東北支援に



千川先生（写真上）が考案した「気仙沼灰干しサメバーガー」（写真下）の「南三陸復興市」での試験販売風景（2017年12月）



「再生ネットの応援団として頑張ります」

2006年1月1日発行の三宅島新報1号の千川先生の寄稿文を再録した。

私は、多摩ニュータウン地区に避難されていた三宅島の方々のために、2000年9月下旬から昨年1月まで、情報紙『アカッコ』三宅・多摩だより』の編集・発行に携わってまいりました。また、昨年10月の上旬に学生を連れて三宅島にお住まいになっている『アカッコ』の

読者の方々のご自宅にお伺いし、生活状況や必要な情報などアンケートと聞き取り調査をさせていただきました。ご協力いただいた方に感謝申し上げます。「三宅島ふるさと再生ネットワーク」の活動を佐藤会長さんからお聞きし、昨年10月から学生と一緒に「ネット」の協力

者として「在京三宅島会」のお手伝いをしております。現在、この「三宅島新報」の印刷と「ネット」のホームページづくりを担当しております。5年余にわたり、三宅島のみならずのお手伝いをさせていただきましたが、今後とも、微力ながらも、お役に立つことができれば幸いです。

2006年1月1日発行の『三宅島新報』第1号から第70号発行までの12年半にわたる「三宅島

ふるさと再生ネットワーク」とDTPAのみなさんの、長年にわたる取り組みに、心より敬意を表します。私自身は、

2012年まで『三宅島新報』の印刷のお手伝いをしてきましたが、その後、東日本大震災の津波被災地である宮城県の南三陸町の復興イベント

他方で、気仙沼漁港で年間約一万吨水揚げされ

南三陸町と気仙沼市においてになる際にお声がけいただければ、サメの灰干しなど現地のおいしい食べ物を召し上がれるようお取り計らいいたします。

2000年噴火当初から全島避難中の避難先への支援をし、灰干し商品開発（現在は、元村会議員、漁協役員であった浅沼徳宏氏が商品製造販売を行っている）や火山ガスで枯れた樹木を利用した復興事業などを提起した大妻女子大学大学院人間文化研究科・人間関係学部教授の千川剛史先生。在京者へのアンケートも数回にわたり行い「ふるさとネット」の活動の基盤づくりに貢献した千川先生に、三宅での活動やその後の東北での取り組みに関する寄稿をいただいた。

南三陸復興市は、2011年4月末の開始から今年6月まで毎月末に80回開催され100回を目標に継続する予定です。私は、第1回から現在まで物品販売を行うとともに、学生たちと来場者アンケート調査を5年にわたって実施し、その結果を復興市の関係者にお伝えして運営の改善等にお役立ていただいております。

南三陸町と気仙沼市においてになる際にお声がけいただければ、サメの灰干しなど現地のおいしい食べ物を召し上がれるようお取り計らいいたします。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒173-0005
東京都板橋区仲宿2-1
TEL 090-4922-0798
FAX 03-3964-4065
発行人：会長 佐藤就之

三宅島新報 第70号 記念特集号

次号の発行は
10月1日です

「南三陸復興市」と気仙沼特産であるサメの灰干しの商品化・事業化の支援活動に取り組んでおります。

るサメの灰干しの商品化・事業化に現地の方たちと2012年から取り組んでおり、今年の8月に市内で灰干しの加工場が併設されたレストランが完成し、営業を開始する予定です。

が70号の節目を迎え

た。その発行の中では、三宅と同様に故郷に帰れない人を出した福島第1原発の問題も取り上げてきた。今号では、弁護士丸山輝久先生の著書を紹介し、この問題を改めて考える機会にしたい。

会長時評

発行70号の節目を迎えて

原発事故 再考の機会に

皆さまに感謝を

本紙は、第70号発行記念号として大妻女子大学

院千川教授にご寄稿を頂いた。第50号記念号は、NHK解説委員（現在・国士館大学教授）山崎登さんであった。

第1号の発行は、2006年1月1日、ふるさとネットの結成は2005年4月1日で、本部は三宅島、事務局は東京・板橋区であった。2016年6月より本部・事務局は、〒173-0005 東京都板橋区仲宿2-1 会長佐藤就之方。副会長・三宅島支部長の光安千久子さん（三宅島三宅村神着1391）が

島情報や「新報」寄稿依頼など積極的に物心両面で支えている。

新報は、2015年7月第58号まで隔月発行。それ以降は1、5、7、10月の季刊号。人口減少対策・島への移住促進、観光と農・漁業振興、支え

あう仕組みづくり、火山災害、被災地連携など提起する。編集の山田先生・DTPA、印刷所、発送配布の事務局、三宅村人材センターの島内全戸配布と、それを支えるご寄付者の皆さまに心より感謝を申し上げます。

丸山先生の第一読を

本紙3面には、原発事故により三宅島に避難し

ている国分晶子さんから、福島県浪江町に里帰りし現地の状況をお伝え頂いた。

それに関連して、長年お付き合いのある弁護士丸山輝久先生から寄贈された「福島第一原発事故の法的責任論へ1」国・東京電力・科学者・報道の責任を検証する」第2刊「福島第一原発事故の法的責任論へ2」低線量被曝と健康被害の因果関係を問う」を紹介する。

二冊とも400ページを超える書であり、ここで的確に紹介することは、困難である。後はぜひ一読していただきたいと願っている。

本書に

福島第一原発事故の法的責任論へ1へ2著者 丸山輝久
発行所 株式会社明石書店 各巻定価（本体3,200円＋税）
〔申込み〕 FAX03-5818-1174 E-mail ei@yodakashi.co.jp



よる2011年8月に原発事故被災者支援弁護団の団長に就任、2015年以降は共同代表を務めている。そ

こには400名を超える弁護士が結集している。2017年4月時点で7件（原告総数1467人）の提訴があり、その他にも全国の弁護団が多数提訴しており、原告の総数は、約1万2千500人に至る。

丸山先生は、「二度と本件原発事故のような過酷事故（SA）を起こさないために」本書を執筆した。

被災者と連携して声を

第1巻の目次は、I部 福島第1原発の概要と過酷事故の原因 II部 福島第一原発事故の責任 概論では、東京電力、国「原子ムラ」の実態とその関係者の責任、さらには、マスコミの責任にも触れる。

第2巻では、原発事故被害の特徴と放射線被曝、放射線被曝と原発事故の歴史、低線量被曝の問題点、本件原発事故における低線量被曝対応、福島で続く低線量被曝被害の危惧、判例の趨勢と司法に課せられた責任が書

かれている。以上目次の紹介にとどめるが、特に、2巻の「子どもの甲状腺ガン」の多発―岡山大学の津田教授の子どもの甲状腺の多発、もう一つは、除染が完了している地域で再汚染が進行しているという論文を紹介している。

浪江町は避難解除から1年がたつ3月1日時点で、住民登録者1万4千885人、実際の居住者516人内65歳以上222人、20歳未満11人で居住率は3.5%となっている。原発に近い自治体ほど、居住率が低くなっているのが現状だ。（日本経済新聞3月31日夕刊）

今後、提訴が進むとメディアでも取り上げられる機会が多くなる。新聞・テレビのマスコミ関係者の方々も被災者のために、本書の紹介と購読をお願いしたい。更に、裁判の行方についてもしっかり注目して、私たちと共に、被災者と連携して行動と声を上げよう。（佐藤）

浪江町からの移住者 国分さんの現況

帰れないふるさと想いつつ

福島第1原発事故でふるさとを離れ、現在は三宅で生活する国分晶子さん。以前にも寄稿をいただいた国分さんに、ふるさと福島への想いや介護員として頑張っている現在の状況などについて、改めて寄稿をお願いした。



国道114号線から浪江町の実家へ入る道に設置されたゲート

3年ぶりの帰省

4月中旬、亡母の四十九日と納骨、亡父の三回忌の墓参りのために、福島（浪江町・津島）に帰省しました。前回は、亡父の納骨で、今回は亡母の納骨のため、3年ぶりの帰省でした。

東日本大震災による原発事故で、全町民が避難を強いられて来た浪江町一部が、昨年の3月末に避難解除になりました。解除と同時に、未だ

に「帰還困難区域」である「津島地区」のど真中を通っている国道114号線（通称・福浪線）に設置されていた、2ヶ所の検問と大きなゲートが撤去されました。その代わり、国道から入る全ての横道が封鎖され、施錠されました。住民が出入りする時（自分の家を見に行く事や、お墓参りなど）は、これまで同様、立入り申請と許可が必要です。しかし、昨年の4月以降は、申請した時間

入れない悔しさ

に、担当者が、現地に来て鍵を開け閉めすることになったのです。滞在時間は、最長5時間です。車と同乗者のチェックは勿論ですが、申請した時間に少しでも遅れると理由を聞かれるそうです。

今回、実家とお墓に行くための許可は、弟が手配を済ませていたので、スムーズに入れましたが、同じく「津島地区」内にある、私の家に行くためには、更に別の許可が必要です。実家から、車で10分位の距離にも関わらず、別のゲートを開けてもらわないと入れないのです。「ここまで来ていながら、自分の家の前を通る事さえも許されないのか」と悔しい思いで一杯でした。

孫たちがやってきた

3月末の春休みに、浪江町（津島）から福島市に避難している長男の所の孫娘二人（中2、中3）と川崎市に住んでいる長女とその子供たち（小2、園児）で計5名が三宅島にやってきました。亡母の葬儀で、皆と会った時に、私は、三宅島の素晴らしさを熱く語っていました。

それが功を奏したのでしょうか。民宿を予約していたのに、孫たちが「ばあばの所に泊まりたい」と云うので、私がお世話になっている会社の寮の部屋で過ごすことになりました。

お風呂は、皆でふるさとの湯に行きました。唯一、男一人の小2の孫は、ひとり男湯に入り、島の方から「ひとり、えらいなあ」と言われたと喜んでいました。そういう所にも、島の方々のやさしさを感じて、嬉しくなりました。

島を何周も廻り、あちこち案内しましたが、孫達が一番喜んでくれたのは、伊豆岬の地層と大久保浜で波と戯れながらの浜石と貝がら拾いでした。おみやげにすると云ってリュックに詰め込んで帰って行きました。大路池に行った時、「お母さんが、三宅島に来たかった理由が解るような気がする」と娘が言ってくれました。子供達にも相談せずに、決めてから知らせたのに、温かく送り出してくれたのでした。

大好きな三宅島で

この春には、介護福祉士の資格も無事に取得する事ができました。

帰れない「ふるさと」を想いつつ、大好きな三宅島で、介護員として頑張る日々です。

年に島に移り住み、子

どもたちに環境教育事業を行ってきたNPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センターの海野佳子さん。海野さんに、島の魅力や島民との触れ合いなどについて寄稿していただいた。

オーシャンファミリー海洋自然体験センター 海野さん

島の魅力は自然と人



海野さん宅のアシタバ畑

「島」は、不思議な感じのする場所のひとつです。都会とは違う自然の濃さや生活の匂い、周りが海に囲まれた特殊な環境であることも、そう感じさせるのかもしれない。沖縄や小笠原、そして、三宅島など、島に移り住んだ人の多くは、訪ねた島に魅了されて移り住んだと話してくれました。私もそんな中の一人でした。

1993年頃から、仕事を終えた金曜日の夜は、東海汽船に乗って三宅島に通い、島の風や匂いを感じ、海や森の自然を丸ごと楽しみ、リフレッシュしてまた仕事に戻る。そんな時間を繰り返していましたが、1995年、そのきっかけは出産でした。この自然豊かな島で子育てをしたいと決心したからです。仕事を辞め、島下部落に家を借り、漁業を生

業とし、畑ではアシタバや野菜を育てて生活の糧とし、夏は全国の子ども達を三宅島に集めて、ジャック・T・モイヤー先生と一緒に海洋環境教育を行う、そんな生活が始まりました。

島での生活を後押ししてくれたもうひとつの理由は、人の心の温かさでした。子どもが熱を出したときなどは、自分の孫のように看病してくれた光安のおばさんの助けがなければ、島での生活を続けることはできなかったかもしれません。

2000年の大噴火。「この自然災害がなかったら、今頃はもうなっていただろう」と、ふと思うことがあります。噴火後は、島の外からまた島を見ています。ライフライン復旧後は、毎年夏、噴火前のように全国の子ども達を集めて、島でスクールを行うことで自然の魅力を伝えていきます。

海野佳子さん…三宅島にも拠点を持つNPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センター（神奈川県葉山町）で子ども達を中心とした環境教育事業を行っている。
<http://oceanfamily.jp/>

三宅高校70周年

10月6日に記念式典と講演会を開催

都立三宅高等学校（中）間均校長は、創立70周年記念行事を平

成30年10月6日、13時から式典と講演会を行う。2013年「第22回夏季デフリンピック卓球競技大会」において女子シン

ご寄付者名

吉島輝雄様、竹野内崇宏様、吉田信行様、匿名1名様（切手代として）、佐藤宗ノ子様、板倉美紀子様、光安千久子様、佐藤就之様 横井和之様
（平成30年3月5日～6月12日）

【ご寄付受付先】

郵便振替口座 00120-3-545036

三宅島ふるさと再生ネットワーク

編集後記

「新報」が今号で70号を迎えました。これまで多くの方の協力で、私た

創立当初は、持ち上がり2〜3歳年上の待機生徒が混合。生徒会長選

挙は5ヶ村の勢力争い、また当時の通学バスは木炭バスで三池浜の坂道でストップし生徒が押し上げ、グラウンド予定地の木の根っこ堀等活気に満ちていた。

先生も情熱的個性豊かで、生徒を自宅に招き蔵書を貸したり語ったり思想的にも影響を受けて巣立ったものである。（S）

ちもここまで活動することができました。今後、皆様を繋ぐ紙面づくりを目指していきます。（DTPA一同）